

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	生徒の言語活動を促す授業づくり
Author(s)	又野, 陽子
Citation	英語教育 , 2021年12月 : 3 - 4
Issue Date	2021-12
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00053067
Right	This is not the published version. Please cite only the published version. この論文は出版社版ではありません。引用の際には出版社版をご確認、ご利用ください。
Relation	



生徒の言語活動を促す授業づくり

又野陽子

Matano Yoko

(山口市立鴻南中学校教諭)

言語活動へ導く提示と練習

即興性や継続性を伴う生徒の自由な発話をめざす際、そこへ至る丁寧な指導や授業の枠組が必要になります。ことばの学習の本質を大切に、自由度を徐々に高めていくような充実した練習や活動を順序立てて展開しながら、生徒が創意工夫を生かして言語使用を行う段階まで導いていくようにしています。“easy, smooth, oral production” (C. C. Fries, *ELEC Lectures*) ができることを目標に、リズムとテンポを大切にされた練習から豊かな言語使用へとつなげます。

新教材の導入、練習

本時のポイントとなる指導項目について文脈をとおして口頭で提示、導入します。生徒の Concentration (集中) と Participation (参加) を保ちながら授業を展開していきます。

○Mim-mem

新教材導入後、基本文の形で、正常速度で、正しい音調とリズムで言えるように、クラス全体で練習します。声かけとハンドジェスチャーで指示を出し、2回繰り返したり、クラスを半分に分けたりして変化を持たせてスピーディーに行います。個人で確認して難しい箇所は全体に戻し、手拍子、身体運動を伴った練習も必要に応じて取り入れます。

○Pattern practice (Variation)

流暢に暗唱できるようになった基本文の一部を変えて別の文を作ったり (Substitution)、数・性・時制・文の種類等を転換したり (Conversion)、基本文に修飾句や修飾節を積み重ねさせたりします (Expansion)。自動的に正確に口から出てくるように進めます。例えば、従属接続詞を用いた複文構造が指導項目である場合、接続詞 (if, that, when, because) を用いて表現の幅を広げながらやり取りする生徒の姿を見据え、基礎の導入、定着をめざします。以下、筆者が1学期に実施した2年生の単元の授業です。

※T: Teacher, C: Class, P1: Pupil 1, #: Repetition, @: Attempted response を表します。

※一般的には T (基本文) →C (#)→T(cue)→P1(@)→C(#)の手順で行いますが、本時では、クラス全体でそろって早く言えることを確認するねらいで以下の手順をとりました。

[Substitution の例] *□はターゲット項目

T: □ you have time, let's go to the curry restaurant.

C: □ you have time, let's go to the curry restaurant. -----(#)

T: the coffee shop

C: □ you have time, let's go to the coffee shop. -----(@)

T: the sushi restaurant

C: □ you have time, let's go to the sushi

restaurant.-----(@) ...

[Substitution を挿んで Conversion に入る例]

T: I think **that** curry came to Japan from India.

C: I think **that** curry came to Japan from India.

-----(#)

T: You

C: You think **that** curry came to Japan from India.-----(@)

T: Question.

C: Do you think **that** curry came to Japan from India?-----(@)

T: Yes.

C: Yes, I do.-----(@)

T: No.

C: No, I don't.-----(@)

Expansion の練習に Conversion を加えてさらに負荷のある練習を行うことも可能です。

○Pattern practice (Selection)

本単元では食文化や好きな食べ物がテーマとなっているため、以下の場面を取り上げました。場面に基づいた教師のキュー (cue)、それに対する生徒の応答を素早く繰り返していきます。

T: Josh wants to eat curry pilaf.

C: Josh wants to eat curry pilaf. -----(#)

T: Question.

C: Does Josh want to eat curry pilaf? -----(@)

T: Answer.

C: Yes, he does. He wants to eat curry pilaf. -----(@)

T: What?

C: What does Josh want to eat? -----(@)

T: Answer.

C: Curry pilaf. He wants to eat curry pilaf. -----(@)

T: Who?

C: Who wants to eat curry pilaf? -----(@)

T: Answer.

C: Josh does. Josh wants to eat curry pilaf. -----(@)

生徒対生徒の対話

教材の場面とは異なる文脈または場面で、既習の文型や語を選択して英語を運用します。場面を示すと、生徒達は理由や条件などをつけながら話題を展開し、自分の思いを豊かに表現しました。

[生徒の実際の発話例]

P1: **If** you have time, let's go to the coffee shop.

P2: Great! I want to buy soda **because** it's refreshing. I often drink soda **when** it's hot.

If you like soda, let's go to 店名. I think **that** their soda is the best. Do you like soda?

P1: Yes, I do. I like soda very much.

...

友達の発話内容に興味を持って聴く姿勢や積極的な挙手による発言 (連鎖的な対話の継続) が教室内にあふれ、クラスの一体感も生まれました。

「If you have time, をつけると丁寧になる」というコメントも見られ、聞き手に配慮した言語使用についての気づきを促すこともできました。

おわりに

Substitution にとどまることなく、Conversion へとつなげ、生徒が意識しなくなるレベルまで学習を進めると操作の負荷量が少なく即座に記憶から取り出すことができると言われています (金田, 2000 参照)。実際に生徒の振り返りシートには、次のような記述が見られます。「繰り返し言ってそれをさらに発展に向けていくことができた。とても良いシステムだと思う」「自然とすぐに英語が出てくる。他の文章でも応用して使えるようになり、とても文章が作りやすくなった。続けてほしい」

「いろいろな疑問文が自由にすぐ組み替えられるようになった」「英語で話す幅が広がった」「英語の授業はリズムカルで楽しかった」「楽しく、元気の出る授業だった。2学期の授業もとても楽しみ！」

自分で連鎖的にすらすら言える、敏速にたくさん発話できるという自信が、心地よさやさらなる意欲につながっているように思われます。

◆参考文献

Fries, C. C. (1958). On the Oral Approach. In

F. Nakajima (Ed.), *Lectures by C. C. Fries and W. F. Twaddell* (pp. 13-23). Tokyo: Kenkyusha.

金田道和. (2000). 「C. C. Fries の理論再訪(1)」
『中国地区英語教育学会紀要』No. 30, pp. 85-93.

又野陽子. (2017). 『中学校英語サポート BOOKS はじめてのオールイングリッシュ授業—今日から使える基本フレーズ&活動アイデア—』東京：明治図書出版株式会社.